

保育者の「伝える力」に及ぼす諸要因の関連

- 保育者における信頼感・省察に着目して その2 -

米川 純子

Relationships among Factors Affecting the Ability of Child Care Providers to Communicate Part 2

- Focusing on Trust and Reflection in Caregivers Child Care Providers -

Junko Yonekawa

キーワード：保育者、伝え方、信頼感、省察、保護者支援

要旨 本研究では、保護者との相談支援にあたる際に必要とされる保育者自身の個人要因である「信頼感」と「省察力」に着目し検討した。第一に、保育者の経験年数と「信頼感」を検討した結果、保育歴を重ねた保育者ほど専門性を意識し、初心者ほど誠実性の意識が高いことが明らかになった。さらに、省察評価においては、「伝わらない」という経験をした保育者の方がより省察評価が高いことが明らかになった。第三に、保育者に「伝えるのに苦労するのはなぜか」という設問に対し、保育者自身の認識の傾向を検討した結果、保育者歴 1～3 年の初心者は「コミュニケーション不足」が最も多く、保育歴 4～9 年の中堅は、「価値観や考え方の違い」の割合が高かった。保育歴 10 年以上のベテランでは、「言葉のスキル」が高いことが明らかになったが、伝える対象者により、カテゴリー内の性質の違いも示唆された。

1. 問題と目的

社会状況の様々な変化に伴い、家庭や地域における子どもの生活環境や生活経験も変化・多様化してきている。子どもたちの育ちの一翼を担っている保育士等が、自らの行う保育の拠り所となる保育所保育指針は、昭和 40 年に策定されてから平成 2 年、平成 11 年と 2 回の改定を経た後、前回平成 20 年度の改定に際して告示化された。その後、子どもの健やかな成長を支援していくため、全ての子どもに質の高い教育・保育を提供することを目指して掲げた子ども・子育て支援制度が平成 27 年 4 月から施行されたことにより、1・2 歳児を中心に保育所利用児童数が大幅に増加するなど、保育をめぐる状況は大きく変化してきている。その他にも、少子化や核家族化、地域のつながりの希薄化の進行、共働き家庭の増加などを背景に、子育てに対する不安や負担感、孤独感を抱き児童虐待の増加という形で表出し、社会問題へと繋がっている。こうした社会状況を踏まえ、幅広い見地から保育所保育指針の改定が行われ、平成 30 年 4 月より新保

育所保育指針が適用されることとなった。今回の改定での重要施策として、①乳児・1 歳以上 3 歳未満児の保育に関する記載の充実②保育所保育における幼児教育の積極的な位置づけ③子どもの育ちをめぐる環境の変化を踏まえた健康及び安全の記載の見直し④保護者・家庭及び地域と連携した子育て支援の必要性⑤職員の資質・専門性の向上が挙げられている。本研究で特に注目したいのが④保護者・家庭及び地域と連携した子育て支援の必要性である。多様化する保育ニーズに応じた保育や、特別なニーズを有する家庭への支援、児童虐待の発生予防及び発生時の迅速かつ的確な対応など、家庭を基盤に生活をしている子どもたちにとって、子育て支援の役割はより重要性を増している。今回の保育所保育指針では「保護者に対する支援」を「子育て支援」に改め、内容の充実化を図っている。石川・井上・会沢（2005）は、保護者対応の基礎的なスキルとなるカウンセリングのニーズが保育現場から多く寄せられるが、実際には研修会の機会がなかったり、時間や参加費の問題などを指摘してい

る。鶴・中谷・関川（2017）は、保育者に対し、精神的な励ましを求めているが、それ以上に具体的な助言を求めている保護者が多いことを明らかにしている。さらに笠原（2004）は、保育士に相談の専門性があり、相談する時間や場所があることを保護者が認知すれば、保護者は自分の内面のつらさなどを保育士に打ち明けることが多くなる傾向にあると述べている。保育現場における相談業務は、「保護者—子ども—保育者」の三項関係で展開されていくために、時として保育者は「子どもの最善の利益」と「保護者支援」の葛藤に苛まれることが予想される。保育者は日々、子どもの視点で保育を行っている。そこに保護者からの視点での思いや行動が介すると、子ども最善の利益を考慮した側面からは、そのまま受容できないことも発生してくる。保育現場でよく聞かれる例として、子どもの体調が悪いのに預ける保護者問題がある。保育者の立場で考えれば、子どもたちには、体調が悪い時くらい家庭でゆっくり過ごしてもらいたい、病気のときくらい親と一緒に過ごさせてあげたいと考えるであろう。また、医療機関で受診し、他児に感染しないようにして欲しいなども理由として考えられる。しかし、保護者の立場で考えたら、仕事を休めない、仕事を休んだら賃金が減ってしまうなどが考えられる。いわゆる倫理的ジレンマのようなものを抱えて保育者は葛藤することが予想される。そこで、本研究では、保護者との相談支援にあたる際に必要とされる保育者自身の個人要因である「信頼感」と「省察力」に着目し検討する。

信頼感

保育所保育指針において「一人一人の子どもの気持ちを受容し、共感しながら、子どもとの継続的な信頼関係を築いていく」、「保育士等との信頼関係を基盤に、一人一人の子どもが主体的に活動し、自発性や探索意欲などを高めるとともに、自分への自信を持つことができるように成長の過程を見守り、適切に働きかける」ことが記されている。幼稚園教育要領においても、「教師は幼児との信頼関係を十分に築き、幼児と共によりよい教育環境を創造するように努めるものとする」と記されている。幼保連携型認定こども園教育・保育要領においても同様に、「保育教諭等との信頼関係に支えられて生活を確立していくことが人と関わる基盤となることを考慮して、園児の多様な感情を受け止め、温かく受容的・応答的に関わり、一人一人に応じた適切な援助を行うようにする

こと」など、「信頼」「信頼関係」「信頼感」というワードが指針や要領の中に多く組み込まれている。では、子どもは信頼できる身近な保育者を認識し始めるのはいつ頃なのか。天貝（1999）は幼稚園児を対象に面接調査を行い、年少期ですでに「信頼できる人」の理解ができおり、年中期から年長期には「信頼できない人」の理解も発達していくと述べている。これらの点を考慮しても、子どもたちにとって家族以外の一番身近な存在である保育者は、子どもとの信頼関係を構築することは重要な課題であると考えられる。しかし、「信頼感」とは、明確に数値化できたり、目視できるものではない。特に子どもたちが感じている「信頼感」は、一番身近な存在である親にとっての信頼感と親に近い存在である保育者にとっての信頼感にも多少の質的な相違があるかもしれない。一方、保護者が感じている「信頼感」も子どもに対する信頼感と保育者に対する「信頼感」は、対象者の質自体が違うので、相違があることが予想される。保育者にとっての子どもに対する「信頼感」と保護者に対する「信頼感」にももちろん、何かしらの相違があると仮定される。さらには、保育者同士での「信頼感」や保護者同士での「信頼感」も違ってくるであろう。岡本（2015）は、信頼感は幼児の姿の中に表れていると指摘している。そこで、保育者が捉える子どもとの信頼感について面接調査を行っている。その中で、保育者が感じている子どもとの信頼感は「受容・共感」「信じる」「保育者による多様な関り」であると述べている。渡邊・矢田（2019）は、保護者が考える保育者の信頼感は「専門知識」「子どもへの愛情・楽しみ」「誠実性」「子どもの観察」の4因子による保育者の信頼感尺度を作成している。本研究では、「保護者—子ども—保育者」における三項関係において、保護者が感じる信頼感と保育者が感じる信頼感に相違があると仮定し、渡邊・矢田が保護者を対象に行った信頼感尺度を同じ項目で保育者に質問紙調査を行い、保護者が求める信頼感を保育者自身がいかに信頼感を意識して保育を展開しているのか検討を行う。

省察

保育所は、児童福祉法に基づき、保育を必要とする子どもの保育を行い、その健全な心身の発達を図ることを目的とする児童福祉施設である。入所する子どもの最善の利益を考慮し、その福祉を積極的に増進するということは、保育所保育指針の根幹を成す理念である。よって、

保育所職員は、各々の職種における専門性を認識するとともに、保育における子どもや保護者等との関りの中で、常に自己を省察し、次の保育に生かしていくことが重要である（厚労省、2018）と保育所保育指針解説書に記されている。また、同解説書において、保育所における保育士としての職責を遂行していくためには、日々の保育を通じて自己を省察するとともに、同僚と協働し、共に学び続けていく姿勢が求められると記されている。当然日々の保育においても、全体的な計画に基づく保育の経過や結果について省察、評価し、課題を明確化することも求められている。幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説においては、園児が将来、性差や個人差などにより人を差別したり、偏見をもったりすることがないよう、人権に配慮した教育及び保育を心掛け、保育教諭等自らが自己の価値観や言動を省察していくことが必要であると記されている。一方、幼稚園教育要領においては、省察というワードは出てこないが、幼稚園教諭が省察を行っていないわけではない。教師研究において Korthagen（2001）は、ALACT モデルを提唱し、省察の過程を説明している。行為：Action→行為の振り返り：Looking back on the action→本質的な諸相への気づき：Awareness of essential aspects →行為の代替方法の考案：Creating alternative methods of action →試み：Trial により、行為と省察が交互に行われることが重要であると指摘している。近年の保育実践において省察は必要不可欠な専門性の一つであると考えられている（秋田、2000）。Schön（1983）により「反省的実践家」という概念が提唱され、保育実践の中での省察の位置づけが明確になってきた。しかしながら、保育者の属性や保育経験などによる個人差要因を含む省察の特徴は十分に考慮されていない。さらに、杉村・朴・若林（2009）は、省察の対象を「保育者自身に関する省察」「子どもに関する省察」「他者を通じた省察」の3つに基づいた尺度開発を行っている。本研究においては、個人要因として考えられる保育者の保育歴と保育者自身に関する省察と子どもに関する省察との関連性について検討する。

2. 研究1

目的

本研究の目的は保育者自身の年齢や保育者としてのライフステージにおける経験年数、雇用形態により、保護者が求める信頼感に意識の違いがあるのかを検討する。

方法

調査対象

保育者の「伝える力」に及ぼす諸要因の関連-保育者におけるコミュニケーションスキルに着目してその1-（2023、米川）と同様。

調査時期

保育者の「伝える力」に及ぼす諸要因の関連-保育者におけるコミュニケーションスキルに着目してその1-（2023、米川）と同様。

調査の手続きと倫理的配慮

保育者の「伝える力」に及ぼす諸要因の関連-保育者におけるコミュニケーションスキルに着目してその1-（2023、米川）と同様。

調査内容

保育者の信頼感尺度

渡邊・矢田（2019）が作成した保育者の信頼感尺度を用いた。保護者が考える保育者の信頼感の4因子「専門知識」「子どもへの愛情・楽しみ」「誠実性」「子どもの観察」に焦点を当てた尺度である。各項目への回答は「あてはまらない」から「あてはまる」の5件法で求めた。得点が高いほど信頼感が高いことを示す。

調査結果

保育者の経験年数と保護者が求める信頼感をどの程度保育者自身が意識しているのかに差異があるのかを検討するために、一元配置の分散分析を行った（Table1-1、Table1-2）。その結果、保護者が求める「信頼感」の4因子のうち、「専門性」と「誠実性」に保育者の経験年数の違いによって差異が生じることが明らかになった。保護者が求める信頼できる保育者の要因の一つに「専門性」がある。「保育者として子どもの発達についての専門知識がある」や「子どもに注意をしたり、褒めたりするなど、メリハリをつけている」など保育者としての専門性が保護者にとっては信頼できる保育者としての要因としてあげられているが、保育者自身それをどの程度意識して保育を行っているのかという観点において保育者の経験年数に有意差がみられた（ $F(2, 538)=19.38, p<.001$ ）。保育経験年数が多いほど有意であったため、Tukey の HSD 法による多重比較を行った。分析の結果、保育者歴1～3年の初心者に比べ、保育歴4～9年中堅、保育歴10年以上のベテランというように、保育歴を重

ねた保育者ほど「専門性」を意識していることが明らかになった (Table1-1)。

Table1-1

保育経験年数と専門性に関する分散分析の結果

	① 初心者 (N=103)	② 中堅 (N=147)	③ ベテラン (N=291)	F
	M	M	M	
	SD	SD	SD	
専門性	36.21 8.07	37.70 8.53	39.30 9.20	19.38***

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

多重比較 ①<③

さらに、保護者が求める信頼できる保育者の要因の一つである「誠実性」にも保育経験年数との有意差がみられた ($F(2, 537) = 6.011, p < .01$)。保護者が求める誠実性には「一人ひとりの子どもやその親に対して態度を変えていない」や「保護者や子どもと接するとき、常に笑顔である」などがあるが、保育経験年数が浅いほど有意であったため、Tukey の HSD 法による多重比較を行った。分析の結果、初心者ほど「誠実性」の意識が高く、3 群の中では中堅が最も「誠実性」が低いことが明らかになった (Table1-2)。

Table1-2

保育経験年数と誠実性に関する分散分析の結果

	② 初心者 (N=103)	② 中堅 (N=147)	③ ベテラン (N=290)	F
	M	M	M	
	SD	SD	SD	
誠実性	17.04 2.12	16.06 2.53	16.33 2.16	6.01*

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

多重比較 ②<③<①

3. 研究2

目的

本研究の目的は、保育者の伝える力に関連する要因として保育者自身の省察評価に個人差要因があるのかを検討する。また、保育者の経験年数により省察評価に差が生じているのかを明らかにする。

方法

調査対象

保育者の「伝える力」に及ぼす諸要因の関連-保育者におけるコミュニケーションスキルに着目して

その1 - (2023、米川) と同様。

調査時期

保育者の「伝える力」に及ぼす諸要因の関連-保育者におけるコミュニケーションスキルに着目してその1 - (2023、米川) と同様。

調査の手続きと倫理的配慮

保育者の「伝える力」に及ぼす諸要因の関連-保育者におけるコミュニケーションスキルに着目してその1 - (2023、米川) と同様。

調査内容

保育者の省察評価尺度

岡本・尼崎 (2015) が作成した保育者の省察評価尺度を用いた。保育者自身に関する省察の「保育関係」「保育観」の2要因と、子どもに関する省察の「保育見通し力」「子ども観察力」の2要因に焦点を当てた尺度である。各項目への回答は「まれにある」から「いつもある」の5件法で求めた。得点が高いほど信頼感が高いことを示す。

調査結果

1) 保育者自身に関する省察評価

岡本・尼崎 (2015) が作成した保育者の省察評価尺度の保育者自身に関する省察項目は「子どもと話した後、自分の言い方が適切かどうか考えることがある」「保育者としての自分の長所・短所を考えることがある」など12項目で構成されている。本研究の第一の目的である保育者の伝える力に関連する要因として保育者自身の省察評価に個人差要因があるのかを検討するため、保育業務上で、相手に「伝わらない」と感じた経験の有無と保育者自身の省察評価の t 検定を行った ($t(538) = 2.624, p < .008, d = .287$)。保育業務上で「伝わらない」という経験をした保育者の方がより保育者自身に関する省察評価が高いことが明らかになった (table2-1)。

Table2-1

保育者自身の省察における「伝わらない」経験の有無

	- t 検定 -	
	経験あり (N=437)	経験なし (N=103)
保育者省察	45.79 (7.47)	43.66 (7.21)

() 内：は SD $t = 2.624$ $df = 538$ $p = .008$

2) 子どもに関する省察評価

岡本・尼崎（2015）が作成した保育者の省察評価尺度の子どもに関する省察項目は「子どものこれからの成長について考えることがある」「子どもと話した後、子どもがどのように受けとめたか考えることがある」など9項目で構成されている。保育者の伝える力に関連する要因として子どもの省察評価に個人差要因があるのかを検討するため、保育業務上の上で、相手に「伝わらない」と感じた経験の有無と子どもの省察評価の t 検定を行った（ $t(538) = 3.074, p < .002, d = .337$ ）。その結果、保育業務上で「伝わらない」という経験をした保育者の方がより子どもに関する省察評価が高いことが明らかになった（table2-2）。

Table2-2

子ども省察における「伝わらない」経験の有無

- t 検定-

	経験あり（ $N=437$ ）	経験なし（ $N=103$ ）
子ども省察	35.28 (5.32)	33.51 (4.93)

（ ）内：は SD $t=3.074$ $df=538$ $p=.002$

本研究の第二の目的でもある、保育者の経験年数により省察評価に差が生じているのかを検討したところ、「保育者自身の省察評価」において、保育経験年数の平均値は、初心者（ $N=103$ ）が 46.21 点（ $SD=6.77$ ）、中堅者（ $N=147$ ）が 45.48 点（ $SD=7.28$ ）であり、ベテランは（ $N=290$ ）が 45.03 点（ $SD=7.45$ ）で、若干初心者が保育者自身の省察を行う傾向にはあるが、有意差はなかった。「子どもに関する省察」においても、保育経験年数の平均値は、初心者（ $N=103$ ）が 34.66 点（ $SD=4.53$ ）、中堅者（ $N=147$ ）が 34.53 点（ $SD=5.08$ ）であり、ベテランは（ $N=290$ ）が 35.25 点（ $SD=5.62$ ）とベテランが子どもに関する省察を行う傾向にあるが、有意差はみられなかった。

4. 研究3

目的

本研究の目的は、保育者に「伝えるのに苦労するのはなぜか」という設問に対し、保育者自身の認識の傾向を検討する。また、保育者の経験年数や伝えるのに苦労する対象者によって差が生じているのかを明らかにする。

方法

調査対象

保育者の「伝える力」に及ぼす諸要因の関連-保育者におけるコミュニケーションスキルに着目してその1-（2023、米川）と同様。

調査時期

保育者の「伝える力」に及ぼす諸要因の関連-保育者におけるコミュニケーションスキルに着目してその1-（2023、米川）と同様。

調査の手続きと倫理的配慮

保育者の「伝える力」に及ぼす諸要因の関連-保育者におけるコミュニケーションスキルに着目してその1-（2023、米川）と同様。

調査内容

具体的に「人に伝えるのに苦労するのはなぜか」自由記述を行った。自由記述の回答を集計し、KH Coder と呼ばれるテキスト解析用のソフトウェアを用いて分析を実施した。KH Coder でテキストマイニング分析し、品詞ごとに多く出現した抽出後リストを作成し、頻度情報を分析した（Table 3-1）。

Tabl 3-1 「伝えるのに苦労するのはなぜか」

抽出語リスト

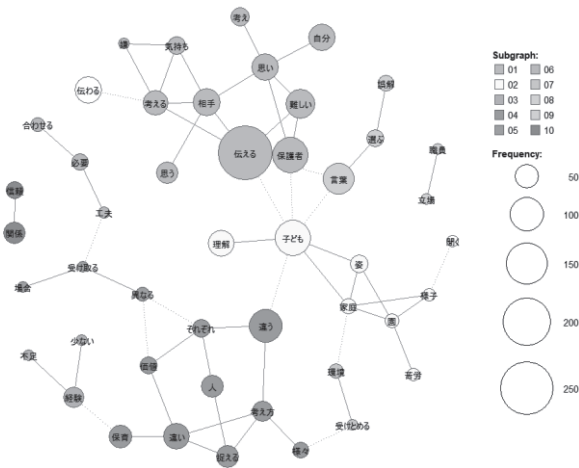
	抽出語	品詞/活用	頻度
1	伝える	動詞	262
2	保護者	タグ	115
3	子ども	名詞	114
4	違う	動詞	96
5	言葉	名詞	88
6	難しい	形容詞	77
7	相手	名詞	66
8	伝わる	動詞	65
9	思い	名詞	64
10	自分	名詞	64

調査結果

抽出語リストから、頻度が高いのは「伝える」（262 回）「保護者」（115 回）「子ども」（114 回）などである。

次に、自由回答欄に多く散見される単語の頻度がどのような文脈で、どのような語と一緒に回答されたかを共起ネットワークを使用し検証した（Table 3-2）。

Tabl 3-2 「伝えるのに苦労するのはなぜか」
抽出語リストの共起ネットワーク



その結果、最も抽出語リストで頻度の多かった「伝える」を中心とした上部に位置するグループでは主に「保護者」「難しい」「思い」「相手」「自分」「考える」などの共起がみられた。最も文脈のつながりが強い「伝える」と「保護者」の記述例を下記に示す (Table 2-3)。

Table2-3 「伝えるのに苦労するのはなぜか」
抽出語リストの記述例

「保護者に伝わらないのはなぜか」
・一人ひとりの保護者の個性に合わせた 伝え方 をしないと上手く伝わらない
・保護者の生活環境や考え方を考慮しながら 伝え なければならないから
・ 伝えたいこと の受け取り方が違う
・ 伝え方 と理解力の違い
・園と家庭での子どもの姿が違うので、 伝える のに苦労する
・遠回しに伝えると 伝わらない
・言葉を選んで 伝え ないと、間違った捉え方をされる
・特に子どもの良くない点などの 伝え方 が難しい
・相手を傷つけたり、不快な思いをさせないよう 伝える のが難しい
・伝える側と伝わる側の概念の違い
(他 105 例)

対保護者に対しては、子どもの姿のマイナス面を伝える時の伝え方や、保護者の価値観や捉え方に考慮した伝え方に苦慮するといった記述が多く散見された。

二つ目に「子ども」を中心としたほぼ中央に位置するグループでは主に、「理解」「姿」「家庭」「園」「様子」「苦労」の共起がみられた。記述例では「**子どもの体調**に関しての心配の度合いに差を感じる」や「**家庭と園の子どもの姿に違いがみられる**」や「**子どもの成長の捉え方の違い**」など、対保護者や対保育者での子ども理解に相違が生じている場合に伝えるのが困難になってしまうこと。また、「**子どもの月齢や性格などを考慮して伝えるのが難しい**」や「**子どもがわかりやすく、簡潔に伝える**ということが難しい」など、子どもへの声かけ方法など保育者自身が自分自身のスキル不足を感じていることが示唆された。

三つ目に「違う」を中心としたほぼ中央に位置するグループでは主に、「考え方」「捉える」「価値」「人」「保育」「様々」の共起がみられた。記述例では、「**人はそれぞれ違った価値観を持っているから**」や「**子どもを思う気持ちは同じであるが立場が違うため**」など、人の価値観がそれぞれ違うから伝わらないと捉えていたり、人の捉え方も様々だからというような、考え方や価値観の違いが人の立場によって違うと捉えていることが推察された。

四つ目に「言葉」を中心としたほぼ中央に位置するグループでは主に、「選ぶ」「誤解」などの共起がみられた。記述例では、「**言葉を選び、伝え方に気をつけないと誤解を招くことがある**」「**言葉足らずや、言葉選びで聞き手にとって違う意味になってしまう**」などがあった。このことから、言葉の受け取り方も人それぞれであり、言い回しや口調などで違う意味に捉えられてしまったり、日頃のコミュニケーション不足のせいで、言いづらいことを伝える際に言葉選びに慎重になってしまい、抽象的な表現や遠回しな言葉を使うことにより伝わらなくなってしまうということが示唆された。

これらの抽出語リストの共起ネットワークの関連性から、「伝えるのに苦労するのはなぜか」を①「価値観や考え方の違い」(N=138)②「コミュニケーション不足」(N=162)③「立場の違い」(N=84)④「言葉のスキル」(N=157)の4カテゴリーに分類した(Figure1)。4カテゴリーの記述例を下記に示す (Table 2-4)。

FIGURE 1 全体での結果

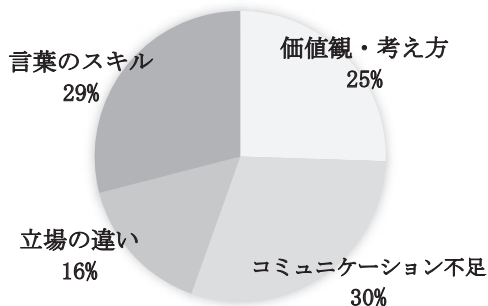


Table2-4 「伝えるのに苦労するのはなぜか」
 4 カテゴリーの記述例

設問「伝わらないのはなぜか」
【① 価値観や考え方の違い】 <ul style="list-style-type: none"> ・人はそれぞれ違った価値観をもっているから ・保育者も保育観が違ったりすると、どうしてもずれがでてしまう ・子育てに対する考え方が違う ・それぞれの認識の違い、思い込みがある ・同じ説明、要望でも捉え方や考え方が違う保護者がいる ・価値観や倫理観などが異なる場合がある ・物の捉え方、子育て観の違いもある ・様々な年齢や人生の経験のある集団では、保育観や考え方も違う ・保育観の違う職員と連携を図るのが難しい ・その人の中の固定概念を崩すのは大変 ・様々な子どもの見方や保育観があるため ・一人一人の環境や考え方の違いがある ・考え方や思いが違う人もいるため、自分の思いを伝えるのは難しい ・もともとの価値観が違う ・基準の違い ・「当たり前」「普通」の違い ・モラルの考えの違い
(他 121 例)
【② コミュニケーション不足】 <ul style="list-style-type: none"> ・話をきちんと聞ける環境を作っていない ・伝える時だけ話すのでは、伝わり方が違う ・日頃からコミュニケーションを図れているか ・保護者も保育者も時間に追われている為、伝え不足や受け取り不足が起きてしまう ・長時間保育で、保護者と直接話をするのが難しい ・お互いに丁寧に話を聞こうとする姿勢が足りない ・伝えたことが両親間で共有されていない ・担任間での共通理解が不十分

- ・信頼関係をきちんと築かないと真意が伝わりにくい
- ・保護者からはなしかけたくなるような関係性が築けていない
- ・保護者と話せる時間が限られているため
- ・連絡帳のやりとりだけでは、伝えられることも限りがあると思った
- ・コロナ禍で送迎方法が変わり、保護者とコミュニケーションをとる時間が少なくなった。

(他 149 例)

- 【③ 立場の違い】**
- ・子どもを思う気持ちは同じであるが立場が違うため
 - ・年代よっての対応の違い
 - ・経験年数があがっていくとプライドも出てくるので伝え方の難しさを感じる
 - ・保育者の視点で伝えようとする、空回りする気がする
 - ・自分の立場をわきまえると言いたいことも言えない場合がある
 - ・担っている役割の違いから、考える内容が違う
 - ・子育てと保育には違いがある
 - ・立場の違いで子どもの捉え方が違うため
 - ・立場が異なり、観点が違う
 - ・子育てを実際に経験していないので、気持ちの理解度が薄いため
 - ・正規職員、非常勤職員で立場が違うから
 - ・育児経験、保育経験の知識の差
 - ・キャリア
 - ・年齢的なもの

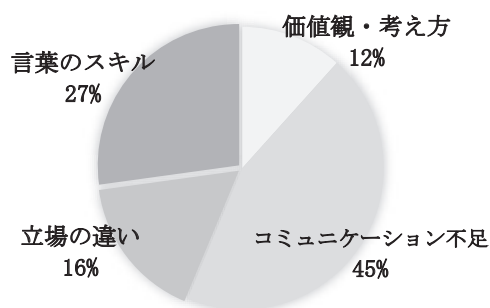
(他 70 例)

- 【④ 言葉のスキル】**
- ・言葉使いや伝え方を相手がどう捉える人か、人によって変える必要がある
 - ・年上の人に対しての言葉選び
 - ・言葉の意味を理解していない
 - ・言葉の表現、ボキャブラリーの少なさから
 - ・言葉の選び方や順番など、伝える力が不足している
 - ・言葉を選んで伝えないと、間違った捉え方をされる
 - ・遠回しに言葉を選んで言ってしまうので、自分が思っていることを感じてもらえない
 - ・伝える言葉が否定的な言葉になってしまう
 - ・理解しやすい言葉にうまく変換できないから
 - ・どんな言葉で言えば相手に伝わり、嫌な思いをさせないか考えてしまう
 - ・言葉を慎重に選ばないと誤解を与えてしまいそうだから
 - ・保護者を不快にさせないよう、言葉を選んで話をする、本意が伝わらないような気がする
 - ・「ちゃんと」という言葉が無意識に多くなってしまう
 - ・言葉使いやニュアンスのちょっとした言い方で伝わり方が違うことがある

(他 143 例)

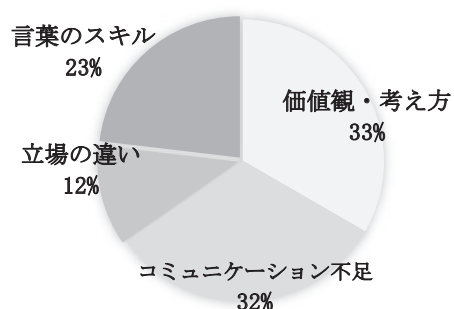
さらに、「なぜ伝えるのに苦労するのか」の4カテゴリと保育経験歴をクロス集計したところ、保育者歴1～3年の初心者は「コミュニケーション不足」が45%で最も多く、「信頼関係が築けていないから」「自分がうまく話せない」などの自分自身のコミュニケーション不足を指摘する回答が多かった（Figure2）。

初心者 FIGURE 2



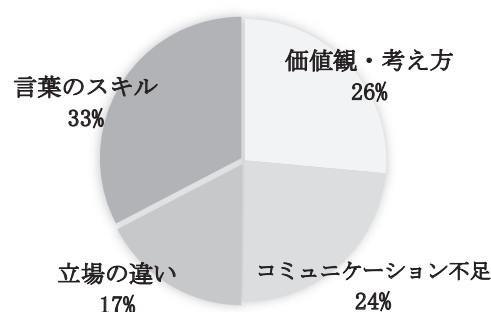
それに対し、保育歴4～9年の中堅は、「価値観や考え方の違い」33%と「コミュニケーション不足」32%の割合が高かった。「価値観や考え方の違い」においては、「受けとめ方や捉え方がこちらの意図とずれることがある」「様々な子どもの見方や保育観がある」など、自分自身が保育業務上で体験し感じた客観的な回答が多く散見された。また、初心者と同じ「コミュニケーション不足」の割合も高かったが、「忙しい送迎時は、言わずにのびのびになってしまうことがある」や「話し合いを十分にできない結果」や「連絡ノートの活用が難しい」など、時間の限られた中で、簡潔にいかにもスムーズに伝えられるかといった視点の要素もみられた（Figure3）。

中堅 FIGURE 3



さらに、保育歴10年以上のベテランでは、「言葉のスキル」33%が高い割合を示した。「自分が良かれと思って話したことでも、言葉足らずや、言葉選びで聞き手にとって違う意味になってしまう」「言葉を選びすぎ、伝えたいことをオブラートに包みすぎて伝えたいことを思ったように伝えることが難しい」など、立場上、デリケートな問題を保護者に伝える場面や、経験の浅い保育者に指導するといった場面を想定した回答が多くみられた（Figure4）。

ベテラン FIGURE 4



考察

本研究では、保護者との相談支援にあたる際に必要とされる保育者自身の個人要因である「信頼感」と「省察力」に着目し検討した。第一に、保育者の経験年数と保護者が求める信頼感をどの程度保育者自身が意識しているのかに差異があるのかを検討するために、一元配置の分散分析を行った結果、保護者が求める「信頼感」の4因子のうち、「専門性」と「誠実性」に保育者の経験年数の違いによって差異が生じることが明らかになった。保護者の求める「専門性」は、保育者歴1～3年の初心者に比べ、保育歴4～9年の中堅、保育歴10年以上のベテランというように、保育歴を重ねた保育者ほど「専門性」を意識していることが明らかになった。一方、「誠実性」においては、初心者ほど「誠実性」の意識が高く、3群の中では中堅が最も「誠実性」が低いことが明らかになった。なぜ中堅保育者の誠実性が低いのか原因は本研究においては解明できていない。同列で分析しているわけではないため、新人の頃に高かった誠実性が中堅になると下がるという単純なものではない。また、本研究での「信頼感」は、保護者の求める4因子を保育者が自己理解して回答したものである。よって、「省察」と同義の性質をもってしまった可能性が高い。逆に捉えれば、

中堅保育者はより謙虚に自分自身の信頼感が低いと振り返っていることも推察される。これらについては、今後の研究課題としたい。

本研究の第二の目的として、保育者の伝える力に関連する要因として保育者自身の省察評価に個人差要因があるのかを検討した。保育業務上、相手に「伝わらない」と感じた経験の有無と保育者自身の省察評価の t 検定を行った結果、保育業務上で「伝わらない」という経験をした保育者の方がより保育者自身に関する省察評価が高いことが明らかになった。相手に伝えて失敗したと自分自身で認めることができたり、相手の反応から伝わっていないと気づける力があると、より保育における子どもや保護者等との関りの中で、常に自己を省察し、次の保育に生かしていくことが可能となることが推察された。さらに、子どもに関する省察評価においても、保育業務上で「伝わらない」という経験をした保育者の方がより子どもに関する省察評価が高いことが明らかになった。子どもの省察評価においても、保育の中で、子どもの姿をよく観察し、自分自身の伝え方により工夫が必要であったのではないかと省察する力がある保育者ほど、子どもたちに関することに視野を広くもって省察できていることが予想された。

本研究の第三の目的として、保育者に「伝えるのに苦労するのはなぜか」という設問に対し、保育者自身の認識の傾向を検討した。また、保育者の経験年数や伝えるのに苦労する対象者によって差が生じているのかを明らかにすることであった。その結果、抽出語リストの共起ネットワークの関連性から①「価値観や考え方の違い」②「コミュニケーション不足」③「立場の違い」④「言葉のスキル」の4カテゴリーに分類された。さらに、4カテゴリーと保育経験歴をクロス集計したところ、保育者歴1～3年の初心者は「コミュニケーション不足」が最も多く、「信頼関係が築けていないから」「自分がうまく話せない」などの自分自身のコミュニケーション不足を指摘する回答が多かった。それに対し、保育歴4～9年の中堅は、「価値観や考え方の違い」の割合が高かった。「受けとめ方や捉え方がこちらの意図とずれることがある」「様々な子どもの見方や保育観がある」など、自分自身が保育業務上で体験し感じた客観的な回答が多く散見された。保育歴10年以上のベテランでは、「言葉のスキル」が高い割合を示した。「自分が良かれと思って話したことでも、言葉足らずや、言葉選びで聞き手に

とって違う意味になってしまう」「言葉を選びすぎ、伝えたいことをオブラートに包みすぎて、真意が伝わらない」など、立場上、デリケートな問題を保護者に伝える場面や、経験の浅い保育者に指導するといった場面を想定した回答が多くみられた。これらの分析結果から、保育者歴によって「なぜ伝えるのに苦労するのか」のカテゴリーの性質の違いも感じられた。例えば、「言葉のスキル」において、初心者の保育者は、自分自身の言葉の表現、ボキャブラリーの少なさから言葉のスキルが低いせいで伝わらないと感じるのに対し、ベテランの保育者は、言葉を選びながら、誤解を与えないように丁寧に伝えた結果として伝わらないこともあると感じている。言葉のスキル一つをとっても、「ボキャブラリーの低さ」と「抽象的な言葉での誤解」では性質が違う。「伝えるのに苦労するのはなぜか」という設問は、対子ども、対保護者、対保育者の三項関係を基に回答している為、対象者が異なる。それゆえに、対象者によって省察の性質も違ってくことも推察される。本研究では、保育経験年数別に省察について検討したが、今後は、対象者別の省察についても検討していく必要がある。分析の結果から察するところ、森上（2001）が指摘しているように、人がどのように見えるかということではなく、保育者自身が実践をどうみて意味づけるかが自分の保育を振り返るという省察行動にとって重要であると考えられる。さらに、森上（2000）の「保育者の専門的技術と人間性は相互に支え合う関係であり、深い子ども理解に支えられない専門的技術を抜きにした人間性だけではそれは保育の専門性とはならない」というように、保護者の求める信頼できる保育者の要因でもあった「専門知識」「子どもへの愛情・楽しみ」「誠実性」「子どもの観察」は、「省察」ができてこそ、相互に支え合うものとなると考えられる。本研究においては、保育者の個人差要因に着目した為、「信頼感」と「省察」について、前後の関係性までは検討されていない。個人差要因として保育経歴年数や保育経験を基に比較したが、保育初心者が訴えるコミュニケーション不足に、ベテランや中堅保育者からの直接的な指導や外部を介した第三者による間接的な研修会といった要素が加わった時に個人差要因も変化することも予想される。このような保育現場の組織風土などの環境面も視野に置き、今後の研究課題としたい。

謝辞

本研究を実施するにあたり、現任保育者研修会にご参加いただきました先生方をはじめとする保育者の皆様に多大なるご協力をいただきましたことに深く感謝申し上げます。

引用文献

- ・秋田喜代美（2000）「知をそだてる保育ー遊びでそだつ子どものかしこさー」、ひかりのくに株式会社
- ・Korthagen, F. A. J（Ed.）（2001）Linking practice and theory: The pedagogy of realistic teacher education. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
（コルトハーヘン, F. A. J 編著、武田信子監訳、今泉友里、鈴木悠太、山辺恵理子訳（2001）、教師教育学ー理論と実践をつなぐリアリスティック・アプローチ学文社）
- ・石川洋子・井上清子・会沢信彦（2005）「子育て支援とカウンセリング（1）ー保育者のカウンセリングに対するニーズを中心にー」、文教大学教育学部教育学部紀要 第39集 pp. 51-62.
- ・杉村伸一郎、朴信永、若林紀乃（2009）「保育における省察の構造」、幼年教育研究年報、第3巻、pp. 5-14.
- ・岡本浄実・尼崎光洋（2015）「保育者の省察評価の開発」、地域政策学ジャーナル 第4巻第2号 pp. 27-38.
- ・笠原正洋（2004）「保育園児の保護者が子育ての悩みを保育士に相談することに何がかかわっているのか」、中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要、36、pp. 25-31.
- ・Schön, D. A.（1983）The reflective practitioner: How professionals think in action. New York: Basic Books.（佐藤学・秋田喜代美（訳）、専門家の知恵ー反省的実践家は行為しながら考えるーゆりみ出版）
- ・鶴宏史・中谷奈津子・関川芳孝（2017）「保育所を利用する保護者が保育士に悩みを相談する条件ー保護者へのインタビューを通してー」、武庫川女子大学大学院教育学研究論集 第12号 pp. 31-38.
- ・天貝由美子（1999）「幼児期における信頼感の発達ー信頼できる人・信頼できない人の理解の観点からー」、日本教育心理学会総会発表論文集、41、pp. 426.
- ・森上史朗（2000）「保育の専門性・保育者の成長を問う」、発達 83、ミネルバ書房、pp. 70.

- ・森上史朗（2001）「津守保育論に学ぶ」、発達 88、ミネルバ書房、pp. 41.
- ・渡邊賢二・矢田実優（2019）「保育者の信頼感尺度の作成ー幼稚園教諭と保育士別の専門性との関連ー」、皇學館大學紀要 pp. 271-286.
- ・米川純子（2023）「保育者の「伝える力」に及ぼす諸要因の関連ー保育者におけるコミュニケーションスキルに着目して その1 -」、東北生活文化大学・東北生活文化大学短期大学部紀要、No. 54、pp. 78-88.